

1. はじめに

(1) サッカーの特性

サッカーは、敵味方2つのチームがコートの中で入り交じり、主に足でボールを扱いながら、近くにいるフリーの味方にパスしたり、相手に取られない位置でドリブルしたりしながら攻撃を行い、得点を競い合う運動である。攻守の切り替えが速く、運動量の多い運動である。手を使わないので、ボールの扱いが難しくなかなか得点できないことが多いが、パスやドリブルでボールを運んでシュートが成功したときの喜びは大きい運動である。また、ゲームを楽しむために、マナーやルールを尊重し、チーム内での協力が必要となるなど、運動を楽しむための社会的態度を養うことができる運動である。

(2) 児童の実態

児童数24名の本学級の児童は、外に出てサッカーを楽しむことよりも、体育館でのドッジボールや、読書などを楽しむ傾向がある。また、地域にサッカークラブもなく、サッカーに日常的に慣れ親しむ機会がないのが現状である。本単元に入る前の事前アンケートでも、「体育学習が好き」と答えた児童は、全体の約75%程度ある中、「サッカーが好き」と答えた児童は50%程度と学級の半数程度にとどまっている。「サッカーが好きではない」と答えた児童は、「パスがうまくできない」「パスがまわってこない」「蹴るのが苦手」「ボールがこわい」「サッカーという運動の仕方が分からない」という意見が多かった。

運動のもつ特性と児童の実態をふまえ、積極的に友だちとかわり合う中で、サッカーの楽しさを味わってほしいと考え、実践を行った。

2. 指導の工夫

○ボール慣れを意図した運動と教材教具の工夫

- ・「ラダー」を活用した、多様な動きの連続による準備運動

「サイドステップ」「もも上げ運動」「体を反転させる運動」など

- ・反発力の低い「フットサル用ボール」の活用

- ・ペア活動での、基礎的動きの習得

「インサイドキック」「トラップ」「パスを出した後の動きの連続」など

(三角形でパスを毎時間行い、その記録を残していき、パスの成功回数を向上させるために習得したい技能を話し合わせる活動を取り入れた。)

- ・少人数のチーム編成により、ボールに触れる機会を増やす工夫

(1チームの最大人数を4名として、1人1人の運動量の確保と、ボールに触れる機会を増やした。)

○技能の向上を意図した運動の工夫

- ・チーム実態を考えさせた運動の選択

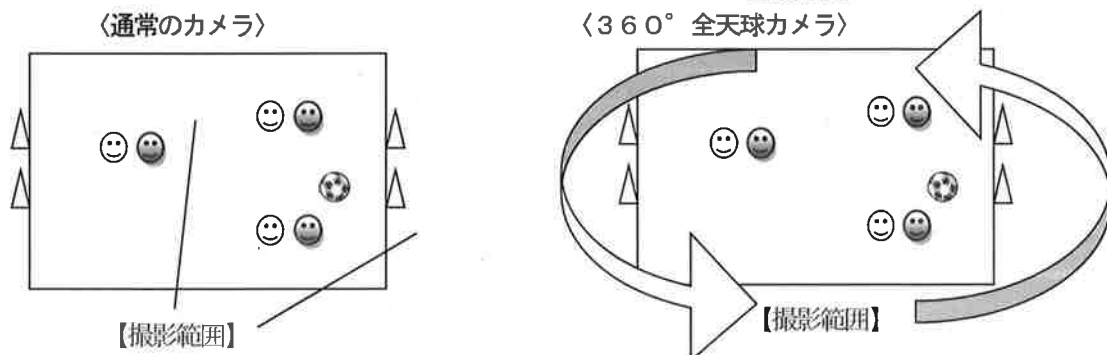
◇「活動①(わたしたちの体育)」を参考にし、チームの実態を考えて選択し、動きを習得させる。

「2対1のゲーム」「3対2のゲーム」「2ゴールゲーム」「コーナーキックゲーム」など

◇「コートのかふう(わたしたちの体育)」を活用し、コートの特性に合った作戦を考えさせる。

「グリッドコート」「ゾーンコート」「トライアングルコート」などのコートに応じた「ロングパス作戦」「ショートパス作戦」「三角パス作戦」「サイドポジション作戦」など。

○ICTの活用 → 360° 全天球カメラの活用による、チームの動きの全方位視覚化。



- ・360° 全天球カメラの活用に伴う、アプリケーションソフトの活用
(360° 全天球カメラで撮影した映像を、天地補正映像に変換するために活用。)

- ・電子黒板の活用

○話し合い活動の充実

- ・作戦ボードと映像を活用した話し合いの工夫

(作戦ボードを活用して作戦を立てたり、チームの動きを話し合ったりしてゲームを行った後、その作戦や動きが実践できていたか、また、コート全体の使い方など、360° 全天球カメラの映像で確かめ、より効果的な動きを話し合う活動を取り入れた。)

- ・めあてを達成するための話し合いになるように、話し合う内容を明確にする。

3. 成果と課題

- ・事後のアンケートでは、「サッカーが好き」と答えた児童は80%程度あった。事前の50%程度の値に比べて変化が見られた。「どこに動いたらいいかわかると楽しい。」「パスがたくさん回せたと、自分でもうまくパスができた。」など、友だちとかわる中でサッカーの運動特性を理解して動いたり、技能の向上を感じたりすることができた児童が多くなった。
- ・360° 全天球カメラを活用したことによって、これまで気がつくことができなかったボールがあるエリア以外での自分たちの動きや、生かしていないコートの空いたスペースに気づき、よりよい動きを考える児童が増えた点において、ICT活用が効果的であったと考える。一方で、360° 全天球カメラなどの映像資料の活用では、その映像によって児童が本時のめあてに対する課題をもてるよう、映像を確認する視点を明確にしておくことが大切であると感じた。

【実践事例 その2】

第4学年「体ほぐしの運動」の実践を通して

日南町立日南小学校 永岡 康隆

1. はじめに

(1) 体ほぐし運動の特性

運動経験の有無が影響することなく誰もが楽しめる手軽な運動や律動的な運動を通して、運動の得手不得手を越えて、仲間と運動を楽しんだり協力して運動課題を達成したりしていくことができる運動である。また、体を動かす楽しさや心地よさを味わうことによって、自分や仲間の心や体の状態に気付き体の調子を整えたり、仲間と交流したりすることのできる運動であり、友達同士の関わりや協力の中で心と体がほぐれていくことを児童が実感できるようにさせていく必要がある。

(2) 児童の実態

児童数28名の本学級の児童は、休憩時間に体育館や中庭で体を動かす児童が非常に多く、本単元に入る事前アンケートでも「体育学習が好き」と答えた児童は全体の88%、「運動が好き」と答えた児童は92%であった。普段から児童の多くが走ることやボールを使った運動、鬼ごっこや縄跳びなどを行い、遊びの中で友だちと一緒に体を動かしている。「体ほぐし」の運動の種類を児童に聞いてみると「ストレッチやランニングやステップ走」などの意見が多かった。また、体ほぐしが心をほぐす役割なっていることについて、どの児童も自覚していない、または知らない状況であった。

2. 指導の工夫

【かわり合いながら心や体の変化への気付きを促すための工夫】

○体ほぐし運動のポイントを毎時間確認

→運動によってどのように心と体が変化したのかに意識を向けられるようにする。